

---

# シュバルトの伝説

choro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シュバルトの伝説

### 【Nコード】

N3924E

### 【作者名】

choro

### 【あらすじ】

シュバルトに伝わるある伝説。国乱れるとき、5つの魂が現れる。剣道の大会で優勝した直後に少女は異世界に飛ばされた。少女の使命とは何か？

## プロローグ

くプロローグく

物語は語り継がれる。

今ここに新たな伝説の1ページがはじまる・・・。

シュバルトに伝わる伝説

国、乱れるとき、五つの魂が現れる。

剣士の魂・賢者の魂・癒士の魂・探知者の魂、そして治者の魂。

剣士は剣を取り、戦い、賢者は知恵を出し、癒士は傷を治し、治者が国を治める、そして、探知者は彼らを見つけ出す。

彼らの体にはこの国の紋章が浮かび上がるという。

彼らはこの地に平穏をもたらす者である。

伝説どおりのことが過去に2回起きているという。

現在生きている者の中にこれを見たものはいない。

しかし、証拠らしきことはある。

シュバルトの王家はこの2回の時期を境に血が大きく異なっているという。



## プロローグ（後書き）

最後まで書けるか不安ですが、がんばります！

## 1、剣士の魂

パーン

「一本！」

竹刀が打つ音が響いている。

木乃森武道館の剣道場では、現在、剣道の全国大会が開催されている。

先ほどの試合は準決勝だったようだ。

ひととき大きな声援が飛び交う中、決勝戦が始まった。

「はじめ！」

審判の声がかかる。

このレベルになるとすぐには両者とも動かない、気迫のぶつけあいだ。

観客の注目は、眼下の試合、とりわけその片方の少女に注がれていた。

相手は男である。

この大会は力のあるものが出場するという形式のため、男女で対戦という図式が起こるわけだが、

決勝戦での対戦というのはこれまでに例のないことだった。

自然、観客の注目も高まる。

だが、観客の注目しているのは試合結果だけではなかった。

少女自身の容貌である。

面をつけても、隠し切れない整った顔、試合に集中してきりっと引き締まった唇、凜とした立ち姿、

試合中はどの男性よりも凛々しく、試合に勝利して、微笑む姿は、

誰よりも可愛い。

そんな両極の魅力を持つ少女は、女子からは王子のように慕われていたので、男子が不用意に近づけば排除されていた。

それでも隠れファンは数知れずである。

彼女の实力は折り紙つきだ。

祖父が居合いの範士、父が剣道の範士であるという彼女は、小さいころからその両方を叩き込まれた。

小学・中学と出場する大会ですべて優勝。

高校に入ってからそれは変わることなく、これが高校生活最後の試合である。

そんなわけで、会場の観客たちは、昔から少女を知っているものが多い。

俄然注目が高まるはずである。

試合に動きがあった。

男のほうに少女に切り込んだ。

すばやい動きであったが、少女はそれを避け、一瞬のうちに胴を払った。

パーン

「一本！それまで！」

観客が沸き立つ。

相手に礼を取ると、少女はゆっくりと面をはずし、観客に向かって微笑んだ。

「見つけた。剣士の魂を持つものよ……。」

観客に混じって試合の様子を眺めていた男はそうつぶやいた。

髪のに隠れて顔は良く見えないが、年は20代中頃か。

風変わりな衣に身をつつんでいるのにまわりの人間は違和感を感じないのか平然としている。

男は少女が会場を出ると同時に席を立った。

少女は更衣室へと向かっていた。

その視界の中に違和感を感じて少女は首をかしげる。

「さすが、気づかれましたか？」

目の前まで来ていた男がそう言葉を発した。

そうして少女は違和感の正体に気づく。

この男はなぜこんな格好をしているのか？

なぜまわりの人たちは平然としている？

「それは私がちよつと催眠をかけたからですよ。」

少女の思考を読んだかのように男が答える。

「私と供に来てください。正確には私は送るだけです。」

「え？」

何を言われたのか判断できないうちに少女の周りに光が立ち始める。

「あなたの使命が終われば帰れますから。」

その言葉が終わるか終わらないかの内に、少女の姿は光とともに消えていた。

「頼みましたよ。我々の国を救ってください・・・。」

目の前から消えてしまった少女に向けての言葉だろうか。

その声はどこか寂しそうで、真の願いが込められていた。

「さて、私が帰る方法を探さなくては。」

男の名はニケ・ロイサード。

彼の役目は王宮に仕える国一の賢者だといわれている老師の頼みで、剣の魂を持つものを探して来いといわれ、

少女を送り届けることだった。

そう彼は、たったいま自分の使命を終えたと思っていた・・・。

なぜ老師は自分を使わしたのか、なぜ自分が少女を見つけられたの



か、その意味することに彼はまだ気づいていなかった。  
しかし物語は動き始めたばかりである。

## 2、サイ・コースナー

ドサッ

「痛ったーい！」

声を上げたのは先ほどの少女である。

「もう何なのよ！いきなりっ！もし下が芝生じゃなかったら大変だったじゃない！」

現在少女がいるのは青々とした一面の芝生の上であつた。

少し先には森が見える。

「っていうか、ここどこなのよ！」

訳も分からず、知らない人に、いきなり知らない世界に飛ばされてしまった、少女の悲痛な叫びを聞くものは誰もいない。と思われた。

キーン キーン

何か金属がぶつかり合うような音とともに何かを言い争う男の声が近づいてくる。

「・・・ら・・・い・・・だよ！」

「・・・んな・・・お・・・ころ・・・し・・・べる・・・いいんだよ！」

「そうそ・・・おと・・・しく、殺されな。」

「殺す・・・？」

何事かと目を凝らしていた少女の耳にその単語は飛び込んできた。

「殺すって、えー！じゃああの人殺されちゃうの！」

殺されるの意味について考えていた少女はもう目前にまでその集団が近づいていることに気づくのが遅れた。

「隠れないと・・・。」

「お嬢ちゃん？どこに隠れるって？」

下卑た笑いを浮かべた明らかに悪そうな男が可笑しそうに言う。  
男たちの接近に気づいていなかった少女は弾かれたように顔を上げた。

「うわっ、こいつすげー上玉でっせ！お頭！」

その言葉に身の危険を感じた少女はとっさにこう言った。

「おれは男だ。」

「またまた！そんなこと言って逃れようたつて、無駄だっ」

少女と侮っていた男の言葉は最後まで続かず、少女の持っている棒らしきもので、叩き潰された。

「こいつほんとに男か！」

「何でも良い。2人とも殺してしまえ。」

お頭と呼ばれた男が口を開くと、男たちはいつせいに襲い掛かった。完全に巻き込まれてしまった少女の最大の救いは、こちらに来るときに一緒に持ってきてしまった竹刀であった。

そして彼女はいく先ほど剣道で日本の頂点に立った人であった。

相手は真剣を持っているが、怯まずに打ち込む。

竹刀は的確に相手の急所を突いていく。

先に襲われていた男の腕もすごかった。

剣舞を踊るように相手を倒していく。

かなり戦いなれているようだ。

少女の剣さばきならぬ竹刀さばきと男の力量に恐れをなしたのか男たちは「覚えとけよ！！」というお決まりのせりふとともに逃げていった。

後に残ったのは少女と襲われていた男だけである。

少女は考える。

男たちは盗賊か何かだろう。

しばらくこちらに居ることになるからまたこういつことがあるかもしれない。

男として通したほうが、身の危険は少ないだろう。

「お前、強いな。」

男が言った。

小麦色の肌に少し茶色がかった黒い髪の毛、精悍な顔立ち。

しかし、少しおどけたような口調だ。

「ありがとう・・・といえいいのかな？」

半ばお前のせいだと思っていた少女は、少し言葉に窮する。

「見たこと無い格好をしているな。先ほどの剣術もおれは見たことが無い。」

「そうかこの世界には無いのか・・・。」

「？おれの名前はサイ・コースナーだ。お前は？」

「わた・・・いや、おれは来菅怜だ。」

「は？」

聞きなれない名前だったのだろう。

「レイだ。レイ。」

「？わかった。レイだな。よろしく！」

「よろしく・・・。」

「それよりお前ほんとに女みたいにきれいな顔してるな。髪も長いし。」

「おれが男だつて信じるのか？」

「だつてレイつて名前なんだろ？それに女は剣を習わない。」

レイは知らなかったが、この世界でレイは男の名前であつた。

「サイでいいか？ここはどこだ？」

「お前この辺知らないのか？ここはシュバルトのマケシュだ。」

「シュバルトつて？」

「え？お前それも知らないの？どこから来たんだよ。シュバルトつていうのはこの国の名前さ。」

「ふん。」

「で、お前はどこに行くんだ？」

「え・さあ？知らない。だつてこの辺よく知らないし。」

「うゝん、じゃあおれと一緒に来るか？案内してやるよ！ってもおれもこの国の人間じゃないけどな！それでもお前よりは知ってるし。」

「じゃあお言葉に甘えて。その剣の腕なら安心だし・・・。」

「おうよ。そこらへんのやつには負けなげ！さて、そうと決まれば・・・。」

「ちよつと待つて！今みたいなことまたあるよな？」

「うゝん？まあ、しょっちゅうだな。特にここ最近は何があれだしな。」

「国がどうかしたのか？」

「あ、いや・・・。」

サイは言葉を濁した。

何か事情がありそうだな。

レイはそう思ったが、まだこれが自分に関係のあることだと思わず、それ以上突っ込んで聞くことはなかった。

「レイ、何かあるのか？」

「あ、うん。ここの人たち真剣使ってみただし、わたし・・・いや、おれも武器が欲しいかなと。」

「あーそうだな。いくら強いつても、その棒じゃな。そういつことなら、いい鍛冶屋を知ってるぜ。」

「おれの注文どおりに作ってくれるかな？」

「ああ、腕は確かだからな。よし！じゃあいくぞ。」

「うん！よろしく願います！」

レイはそう言つて、にこつと笑つた。

それを見たサイは驚いたような困つたような顔をしたが、その表情にレイが気づくことはなかった。

レイとサイ。

これがふたりの出会いであつた。

今はまだ2人の旅はまだ始まつたばかりである。



## 2、サイ・コーズナー（後書き）

一応、恋愛が入ってくるはずなのですが・・・。  
微妙です。

### 3、鍛冶師のもとへ

「ここだよ。」

そういつてサイが連れて行ったのは、森の中にポツンとたたずむ一軒家だった。

「じいー！帰ったぞー。」

「えっ、ここサイの家なの？」

「いや、違うけど・・・今だけ住まわしてもらってるんだ。あ、じい！」

「おう、サイか。お帰り。かわいいお嬢さんを連れてるじゃないか。」

「じい、レイはお嬢さんじゃない。これでも男なんだ。」

「は、はじめまして！コスガ・レイと申します。」

「レイか。いい名じゃ。そうかニケが見つけたか・・・。」

「「？」」

「いや、こつちの話じゃ。わしの名前はウェルコットじゃ。よろしくお嬢さん。」

「あゝ、だからお嬢さんじゃないって！」

「そうかそうか。そういうことにしてやるう。」

「うゝん？まあいいか。それよりこいつに何か武器をつくってくれよ。」

「そうか、どんな武器をお望みかね、レイさん？」

「あ、えと、刀が欲しいんです。」

「刀とな？」「おい、レイ。刀ってなんだ？」

「そうか、この世界にはないんですね。でも、わたしが使えるのは・・・。」

「わたし？」



「あつ、いや、おれが使えるのはこれだけだしな。どうしよう・・・」

「それはどんな形かな。形さえわかれば作れるかもしれん。」

「えっと、形はこの竹刀と同じような感じです。それで、刃の部分なんですけど、片面で・・・。ちよつと、紙ありますか？絵、描いてみます。」

そう言つて、レイが描いたのは細長い明らかにこの世界では見たことのない形をしたものだった。

「変わった形だな。こんな細くて大丈夫なのか？」

「うん。どうですか？作れますか、ウエルコットさん。」

「うむ、試しに作ってみようか。その竹刀とかいうものも貸してくれるかな？」

そう言つと、レイの描いた絵と竹刀を持って、奥へと消えた。

「この奥に作業場があるんだ。」

「そう。そうだ、あれができたら立ち合つて下さい！使い心地など試すには腕のいい人とやるのがいいんです。」

「ああ、おれでなければ相手になるぜ。」

「そつえば、さつきこはサイの家じゃないって言つてたよね？今だけ住んでるつて。どういうこと？」

「ん？ああ、おれがこの国の出身じゃないことは話したか？」

「うん、最初に。」

「ほんというところ自分がどこで生まれたのか知らないんだ。おれが物心ついたときにいた場所はずっと向こうのラケドつて国だ・・・」  
そしてサイは語り始めた。

#### 4、サイの過去

ラケド国。

国土の大部分が山で森におおわれた国だ。

木が多いので林業でとても栄えている。

その国におれは山奥の小屋にタイラおじさんと住んでいた。

おじさんは付けなくていいというので、おれはおじさんをタイラと呼んだ。

彼は剣の達人だった。

そして、いつか役に立つ日が来るからと、彼が知る限りの剣術をおれに教えた。

なぜだかわからないが、タイラは極力、人と関わらないようにしていた。

だから、ほとんどの食物は、自作だった。

着るものは年に一着買いに行くかどうかというところだった。

タイラが自分の父でないことだけを誰に言われずとも知っていた。

甘えてはいけないと・・・。

食事・畑仕事の合間はずっと剣の稽古だった。

数少ない服がぼろぼろになるまで稽古した。

おれの飲み込みが良かったのか、7歳になるころにはタイラと同じくらいの強さになった。

「強くなつたな。」

そのとき一回だけタイラはおれを褒めた。

うれしかった。

別れは突然訪れた。

心臓発作だった。

その日も、剣の稽古をしていた。

タイラは突然胸を押さえてしゃがみこんだ。

おれは持てる力をすべて出し切つて、タイラを家まで運んだ。

苦しい息遣いの中、タイラはおれに語った。

「すでに気付いていると思うが、サイ、お前は私の子ではない。

誰の子なのか知りたいかもしれないが、お前の父・母を私の口から言うことは出来ない。

そう約束した。お前が大人になるまで見てやりたかったが、私はもうすぐ死ぬ。

私がいなくなったあとのお前が心配だ。ここで一人で暮らしていくのは大変だろう。

山を下りなさい。親のことが知りたかったら旅をして、自力で探さるんだ。

ただし、お前が親のことを知ることには危険が伴うんだ。

命を狙うやつが出て来るかもしれない。私の教えたことを忘れるな。

・・・それからもう一つ・・・」

少しだけ逡巡する様子を見せたあと、それを言った。

「サイ、お前の本当の姓は・・・だ。」

その二日後、タイラは亡くなった。

おれはタイラがいればそれでよかった。

両親のことを知りたいとは思わなかった。

だから一人で暮らしていこうと思った。

それはタイラが望んだことではなかったけど、そうしようと思った。

だけど子供が一人で暮らすには、山は厳しかった。

山を下るしかなかった。

おれは山を下りた。

町の人は親切で、おれは町の小さな宿屋に住み込みで働かせてくれることになった。

宿のおじさん・おばさんは、優しく、とても良くしてくれた。

平和だった。

このままここで一生暮らしていけると思っていた。

おれは気付いていなかった。

物陰から自分を見る目があることに。

落ち着いた日々は長くは続かなかった。

宿は何者かに襲われた。

襲撃は夜だった。

最初に気配に気づいたのは、宿の主人であるおじさんだった。

だが、そのときにはすでにその日泊まっていた客の半数近くが殺された後だった。

おじさんにたたき起こされたおれは、目の前で起きている惨状が理解できなかった。

この人たちは何なのか・・・？

男たちの様子から誰かを探していることだけがかろうじて分かった。

危険だ。

頭の中で何かが、誰かが警鐘を鳴らす。

「サイ、逃げるんだ!!」

おじさんの声にはつとした。

「あいつらお前を探してるようだ。」

確かに男たちは『子どもはどこだ!?!』と口々に叫んでいる。

ここにいるのはおれだけだ。

「お前が何で追われているか知らんが、お前はここで一生懸命働いてくれた。」

最近では本当の息子のように・・・。

さあ！早く逃げなさい!!おれたちが食い止めるから!!」

隣にはいつの間に来たのかおばさんもいた。

「そつよ！早く逃げて!!」

男たちが近づいてくるのが気配で分かる。

猶予はない。

「いけっ！」

おじさんの言葉とともにおれは駆け出した。

肌身離さずもっていた剣だけを抱えて・・・。

背後で、剣戟の音がする。

宿のおじさんは昔、町の剣大会で優勝したといていた。

きっと大丈夫だ・・・。

そう信じることで、戻りたい衝動を打ち消し、ひたすら走った。



## 5、サイの傷

ピチュ ピチチチ

鳥のさえずりが聞こえる。

朝かと思って、重い目を開ける。

空が緑だ。いや、空は青いはず・・・？

一瞬、自分がどこにいるのか分からなかった。

だが、次第に思考を取り戻す。

そうだ、きのう襲撃にあったんだ・・・それで、逃げて逃げて、森に入って・・・。

追っ手が来ていないことを確認して、気が抜けた。

「それでそのまま寝ちゃったのか・・・。」

サイは一人でつぶやく。

森の中で、追っ手が来ていないとはいえ、無防備にも朝まで目が覚めない。

こんなでいいのだろうか？

良くないはずだ。

気を付けようとサイは心に誓った。

森の中に一人きり。

幸い辺りには果物がたくさんあった。

しばらくは飢えないで済みそうだった。

だが、これが尽きたら町へ行かなくてはならないだろう。

そこまで考えてたどり着くのは、おれが町におりたら・・・。

おれのせいで！おれのせいで！

宿の人たちは、おじさんたちはっ！！

タイラの言葉を思い出す。

『命を狙うやつが出て来るかもしれない。』

あいつらはおれを狙っていた。確実に・・・。

巻き添えだったんだ、おじさんたちは。

後悔の念が渦巻く。

おれが山を下りなければよかったんだ・・・。

けれど、どこかでその現実を受け止めきれない自分がいた。

本当に狙われていたのが自分だったのか？

ただの賊ではなかったか？

いくら剣が強かったって、おれはまだ9歳になったばかりの子どもだった。

受け止めるには重すぎる現実。

静かな森と時間の中で、宿での光景が繰り返しよみがえる。

そしてたどり着く先はいつも・・・。

『おれのせいだ』

やがて食料が尽きた。

心に不安を抱えたまま、町へ行った。

食糧を得るために働く。

雇い主の人は皆いい人ばかりだった。

その点だけはおれは恵まれていたんだと思う。

だけど、それは良かったことなのか。

おれのいるところには賊の襲撃が起こる。

そして、何人もの人が、おれがお世話になった人が殺された。

どこの町に行っても同じだった。

おれにはタイラに仕込まれた剣の腕があったから、なんとか逃げ延びた。

そこまでされれば嫌でも思い知る。

おれが狙われてると。

おれのせいで、みんな死んだのだと。

なぜ？なぜおれを狙う？

わからない。その理由をおれは知らない。

『お前が親のことを知ることには危険が伴った。』

危険が伴う。

きつとこれが理由だ。

親を知れば、なぜ狙われるのか分かるだろう。

別に親がどんなやつか知りたいわけじゃない。

おれを育ててくれたのはタイラだ。

なぜ狙われるのか知りたいだけだ。







## 6、夕食と歓談

「それで、今いるのがこっつてわけ。」

なんでもないような顔をしているが、話の内容はとんでもない。

会ったときから、明るくて、全然そんな事情を感じさせなかった。

でも、確かにあの剣は戦い慣れしているという感じだった。

きつと、つらいことがたくさんあったに違いない。

それをすべて受け止めて彼の今の姿があるのだ。

強い人だ。

レイはそう思った。だが、

「今の話、おれが聞いても良かったのか？」

そうだ。サイは命を狙われているのだ。

まだ知り合って何時間しかたない私に話してよかったのかとレイは不安になる。

するとサイはニカツと笑って言った。

「こつちう経験してるんだ。人を見る眼は確かだぜ？おれはレイを信用できるやつだと思った。」

サイの言葉にレイの心はほわっと温かくなった。

「じゃ、次はレイの話しな。」

サイが言う。

「といつても、何話せばいいのかな？」

「そうだな。あゝそうだ。お前、この辺のこと全然知らなかったじゃないか。どこから来たんだ？」

そう聞かれて、レイは戸惑った。

果たしてサイは自分が違う世界から来たなんて信じてくれるのだろうか。

こつちに来たと思ったら、殺されかけて、サイやウェルコットさんがいい人なので、

安心してしまっていたが、ここは異世界なのだ。

でも・・・、知らない世界のはずなのに、なぜか馴染みがある。

それに、さっき戦ったときも、体が自然と動いていた。

殺しが日常とまでは言わないが、ありふれた世界なのに、動揺せず  
にそういうものだと、受け入れている自分がいる。

不思議な感覚だった。

「レイ？どうかしたか？」

サイは、見ず知らずの自分に自分のことを正直に話してくれた。

だから、私も正直に話してみよう。

レイはそう思っけて口を開いた。

「おれは・・・」

「おーい！おふたりさん！」

レイの言いかけた言葉はウェルコットの言葉によって、中断された。

「あ、ウェルコットさん！どうですか？」

「うむ、何しろ見たことのない形じゃからな。もう少しかかりそうじゃ。すまんの。」

「いえ、こっちが無理なお願ひしてるんですから、気にしないでください。」

「そろそろ、夕食の時間じゃ。」

そついわれて、あたりが暗闇に包まれ始めていることに始めて気づく。

随分、話し込んでいたようだ。

「うわっ、もうそんな時間だった？」

「あれ？ほんとだ！気づかなかった。」

レイとサイは口々に叫んだ。

「夕食は出来とるよ。」

ウェルコットの言葉に、腹の虫がさわぐ二人だった。

夕食を食べながら、改めてレイは、自分の身に起きたことについて話していた。

サイに続きを促されたのと、ウェルコットにも聞かれたためである。  
「それで、試合が終わって、廊下を歩いていたら、変な男の人に送るとか使命とかいわれて、サイに逢った場所に落ちました。」

「ということは、レイはこっちの世界の人間じゃないってことか？」

「そうらしいです。」

「それにしてもお前、結構強かったな。見たことない剣だったけど、どこで習ったんだ？」

「さっきのは剣道。それは父に教えてもらって、あと、じいさまに居合いというのを。」

「じいさまは強くて、まだ勝てたことないんだ。」

「剣道、居合い……。聞いたことないな。レイの世界の剣術か。」

「そうなるのかな？でも、サイが使ってたみたいなのも、知ってる

よ。日本じゃないけど。」

「もしや、レイさんのおじいさんは、カイという名前かな？」

話を聞きながら何か考え込んでいたウエルコットがレイに問う。

「いえ、じいさまは清徳です。あ、でも曾おじいさまがそんな名前だったような……。」

レイが答えると、「ふむ。」と、また考え込んでしまった。

「どうかしましたか？」

不安になったレイが問うが、「なんでもないよ、心配しなさんな。」  
と言われてしまう。

「それより、レイさん。しばらくここに滞在なさい。」

話をずらすようにウエルコットは言ったが、それはレイにとってかなり重要な問題だった。

なにしろレイはこの世界にこのサイとウエルコット以外に知り合い  
がないのである。

つまり行くところがない。

この申し出はありがたかった。

「そうしろよ。」

サイもそう言ったので、レイはお言葉に甘えることにした。

## 7、痣

レイは湯殿に浸かっていた。

しばらくここにいても良いといってもらえたので、よかった。

さっきのやり取りを思い出して、レイはクスッと笑いをもらす。

「レイ、一緒に入ろうぜ。」

ウェルコットさんの「レイさん、お風呂先に入ってくださいね。」という言葉に甘えて、

「はい。」と頷いたところにかかったサイの一言だ。

かなり驚いた。

「男同士なんだし別にいいだろ？お湯も少なくてすむし。」



そう言われては反論ができない。

だが、サイには男だといったが、実際、レイは女なのだ。

どうしたものと困っていると、助け舟を出してくれたのはウェルコットだった。

「いや、サイ。知り合ったばかりで裸の付き合いをしるというのは酷じゃないかの？」

もしかしたら、見られたくない傷とかもあるかもしれないしの。」

「うゝ、どうだレイ？」

サイに問われる。

サイがいい人だというのは分かっているが、それに女だというのもサイになればれても構わない。

・・・が、一緒に入れるかといったら無理だ。

「一緒はちよつと無理かな。」

目に一杯の懇願をこめてレイは言った。

「まさか、一緒に入ろうなんていうと思わなかった。」

森の中の一軒家にしては広い湯殿にレイのつぶやきが響いた。

体を洗おうと思って、ふと気付く。

「あれ？この痣みたいなのなんだろう・・・？」

左肩のあたりに何かの模様のような痣が出来ていた。

洗っても落ちない。

こっちに落ちたときにぶつけたのだらうと、模様の意味を深く考えずに、レイは温かいお風呂を満喫した。

お風呂から出ると、服が用意されていた。

サイが着ていたような服だ。

麻の生地、襟元や裾、袖に刺繍がしてあって、風通しがよさそうだ。男物なのか刺繍の柄は可愛いものではないけれど。

その服に袖をおすとやはりサイズが少し大きかった。まあ仕方ないだろう。

「お、結構似合うな！」

服を着て、部屋へ戻るとサイが言った。

「ちょっとサイズが大きいけど・・・。」

レイが答える。するとサイがあきれたように言った。

「それ一番ちいさいサイズだぞ？まあ、女みたいに細っこいから仕方ないか。」

それにしても、お前の服変わったやつだよな。あんなの着て動きにくくないか？」

「うーん、考えたことなかったな。それが当たり前だったし。それに普段は違う服だよ？あれは試合用。」

そう指摘されて、あの袴が余り機能的でないと気付く。

「そうか。いずれにしろ、あの服じゃ目立ちすぎるからな。明日、お前に合う服買いに行くぞ！」

隣でふたりのやり取りを聞いていたウェルコットは楽しそうに頷いていた。

翌日、朝食を終えたサイとレイは、市場に来ていた。

色とりどりの野菜や果物を並べた店、干し肉を店先に吊るしている者、身を飾り立てる装飾品を扱う店……。

様々な店が軒を連ねていた。

人もそれなりにいて、結構にぎわっているようだ。

「えーっと、服屋は・・・？あれだ。」

そう言いながらサイはレイをどんどん引っ張っていく。

レイはというと、なじみの無い風景に目をパチパチとさせている。

「こいつに合う服が欲しいんだが。」

店には、サイや今のレイが着ているような服が並べられていた。

裾が広がったものもある。

「はい、お客様。こちらなどはいかがでしょう。」

サイに答えて、店主が取り出したのはかわいらしい刺繍の施された裾の広がった服だった。

「そいつは女物じゃないか。こいつはこう見えて男なんだ。」

サイの言葉で、その裾の広がった服が女物だとレイは知った。

なにしろ、こちらに来てから男の人にしか会っていなかったのだ。

「へえ、旦那さまでしたか。これは失礼致しました。それにしても、きれいなお顔で。」

「ありがとうございます。」

レイは少しはにかんでお礼を言った。

その表情を見て、サイは奇妙な感覚に襲われたが、店主が声を掛けたのですぐに忘れてしまった。

「少し、小振りな方ですから、これはどうでしょう。」

店主が次に差し出したのは、袖や裾に紐がついていて縛れるタイプのものだった。

「ああ、これなら多少大きくても大丈夫だな。レイ、これにするか？」

「うん、いいんじゃないかな。」

レイが同意を示すと、サイは店主に言った。

「じゃあ、これを。そうだな、出来れば柄違いとかで、3枚くらいあるかな？」

「もちろんでございます。ありがとうございます。」

サイが代金を払い、ふたりは店を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3924e/>

---

シュバルトの伝説

2010年10月12日05時17分発行